

## 2010 年前期

1)

本が持っている物理的で可変性のある立体物としての機能のこと。音読をしなくなった今日では、文を音声として聞くより、読者が手の皮膚から受け取る本の厚み、持ち具合、ページの捲り具合、開き具合など用紙の手触りや質感から本の内容やメッセージを感覚的に受け取り、思考を補っていることを指す。

2)

筆者は「本を感じる」と表現している。ここに本の物体としての特性がある。つまり、本は視覚や聴覚だけでなく、皮膚による触覚をも合わせて身体感覚に訴えるという側面があり、それが本の内容を思考する際の補助になる。今日、本が音声化されたり、データされてタブレット端末で聞けたり、読めたりする。しかし、それらには物理的な手触りが無い。これが決定的に本と異なる点だ。本が伝えようとしている内容は、文字列のコピーだけでは不完全であり、読者が物体としての本全体受け取る感覚のすべてを総動員して感受できるものなのでは。私は、筆者が科学技術によって本がデータ化されている現状を踏まえ、物体としての本が持つ意義を問い直そうとしているのだ、と考える。

1)

「健康である」とは、社会が策定した基準で正確に定義され、割り当てられた役割を継続して追行できるだけの肉体状態、健康状態を指す。たいていの場合は工場で問題なく就業できることを意味し、生産社会と密接に結びついている。それに対し、「体力がある」とは、柔軟性、吸収性、適合性があること、未経験の感覚、予想外の感覚にも対応できる準備があることを意味する。これは未来を基準に判断されるものであり、健康と違って「非固定的」な概念である。

2)

「流動的」近代では、健康の判断基準が激しく揺さぶられ、「健康」の概念が「体力」のそれと同じように「非固定的」になっている。例えば、メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）は健康の敵とされているが、最近の研究では血圧や総コレステロール、中性脂肪、BMI（肥満度）はどれも少し高めの方が長生きするという結果が出たという。このように、「よかれ」と考えて進めている健康管理が実は「逆効果」を生む可能性が指摘され、人々の健康観は流動化している。私は健康管理には自己責任という側面があると考え。最先端の医学的知見をもとに自らの判断で健康管理を選択することが必要だ。そして、その際に健康の概念が流動化していることを踏まえ、複数の健康管理の選択肢をバランスよく組み合わせるといった視点が大切だと思う。